

# アフガンの大地に農地を甦らせる

ベシャワール会事務局長 福元満治

## くりかえされるアフガンでの戦争

2001年の9・11事件に対する報復として始まった、米軍によるアフガニスタンでの軍事活動は9年目に入った。米軍だけでなくISAF（国際治安支援部隊=NATO軍）を含めた駐留外国軍は10万人を超えるが、その支配は全土の30%に過ぎず、復活したタリバンや軍閥などの武装勢力に悩まされている。軍事一辺倒では覇権を樹立できないことを米政府も認識し、軍の指揮下で民生支援を行うPRT(地域復興チーム)活動などを試みているが、民衆の反発を招くだけで、うまくいっていない。

時間を遡ると、ソビエト連邦が介入したアフガン戦争(1979~89年)が終結した後、残された社会主義政権が反政府勢力(ムジャヒディン)によって倒壊、その後は反政府勢力同士の権力抗争になった。そして、200万人を超える戦死者と600万人の難民を出した戦争や内戦に対する民衆の厭戦気分に乗じて現れたのが、タリバンだった(1994年)。そのタリバン政権も1996年にはアフガン全土の90%を実効支配したが、2001年11月、米軍の空爆の前に崩壊、農民の大海へと潜った。

このように外国の軍隊によって翻弄されたアフガニスタンとはどのような国なのだろう。

## 8割が農民のイスラム伝統社会

アフガニスタンを空路で縦断すると、眼下には白銀を戴いて6000m、7000mのヒンドークシの山々が美しく連なっている。面積は日本の1.7倍あるが、その8割は長大な山岳地帯である。

意外に知られていないが、ヒンドークシ山脈からの豊かな水に潤されたアフガニスタンは豊かな農業国であった。乾燥地帯ながら冬場の雨で小麦が実り、春夏には雪解け水でトウモロコシや稲の灌漑農業が可能であった。ところが最近の気候変動によって、初夏に急速に解けた雪解け水が土

石流となり、農業用水が必要な時期には濁水が始まるという、干ばつが続いている。

人口二千数百万人の8割は農民であり、干ばつが起こる前には、穀物自給率が9割を超えていたのである。しかし2000年に始まる干ばつによって自給率は6割を切り、数百万の農民が避難民となって出郷していかざるを得なかったのである。

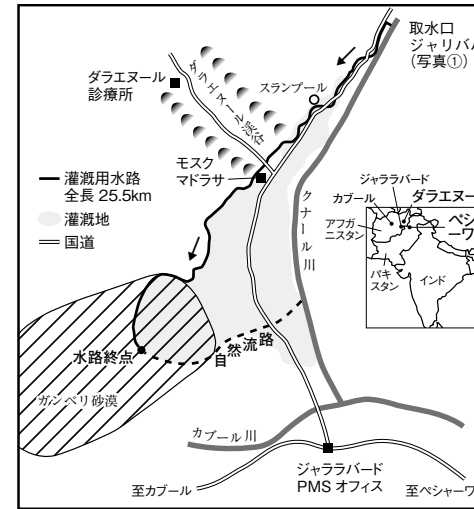
私たちベシャワール会は、1984年から医療活動を始め、パキスタンとアフガニスタンで10か所の診療所を運営していた。しかし診療所のある村々から人々が次々と離村していく事態がおこっていた。病気を治す前にまずは生存することが焦眉の急であった。医療チームでありながら、水源の確保を迫られたのである。

干ばつ対策としてこれまで1600本の井戸を掘り、2003年3月からは用水路の建設も始めた。医療チームが「なぜ井戸や用水路を？」という疑問には、「飢えと渴きは薬では治せないからだ」という中村哲医師(ベシャワール会現地代表)の答えがある。きれいな水と食料さえあれば大半の病気は治るからだ。

## 伝統工法を採用した用水路を建設

緑の農地を取り戻すために、クナール州ジャリババからナンガルハル州ガンベリ砂漠までのマルワリード用水路の建設に踏み切ったが、夏場40度を超える過酷な気候と治安悪化の中での工事は、難問の連続であった。

2009年8月には全長25.5kmの用水路が全線通水し、3000haの田畑が甦った。この田畑に小麦やトウモロコシが実ることで、十数万人が生きてゆくことができるが、7年間の用水路工事で延べ60万人以上の雇用も発生した。この工事がなければ難民になるか、軍閥や米軍の傭兵になるしかなかった人々である。工事が治安の安定ももたらしたのである。この工事にかかった費用は15億円、す



マルワリード用水路

べてベシャワール会の会費と募金のみで賄うことができた。

中村医師は用水路を建設する際、コンクリートによる近代工法だけではなく、伝統工法をおもに採用した。取水口のモデルは、江戸時代にできた筑後川(福岡県)の山田堰(斜め堰)である。護岸には、鉄線でつくった長方形の籠の中に石を積み、その上に土囊を積んで柳を刺す、蛇籠工・柳枝工という伝統的工法を用いた。20万本以上植えた柳は、その背丈と同じ長さの根っこを伸ばし、蛇籠の

写真① クナール川の取水口と斜め堰

写真② 護岸の蛇籠をつくっているところ

石をネット状に抱きかかえて補強するのである。

写真③ 蛇籠と柳で護岸された用水路

アフガン人の男は、子どものときから自分の家を泥と石でつくるので、全員が石積みの技術を持っている。私たち外国人はいつかなくなる。コンクリートでなく蛇籠なら現地の人間だけで、修復できるということである。この工法は、環境問題が浮上する現在、先進国でも見直されつつある。

## 先進国の青写真を押しつけてはいけない

私たちは、医療活動が続ける中でアフガニスタンという農業を基盤とする伝統的イスラム社会の実相を知り、その共同体の何が破壊されたのか、その復興のためには何が必要とされているのかを学んできた。そしてその基本が「農」であり「イスラム文化」であると認識した。

先進国の陥りがちな陥穽は、現地の実情を無視して自分たちの描いた近代的青写真(デモクラシーや近代教育や女性の権利問題等)を途上国の意見を聞かず善意で押しつけることである。相手が抵抗すれば、爆弾まで降らす。

マルワリード用水路に水が流れると、虫や鳥や魚がやってくる。子どもたちも女たちも牛も羊もやってくる。甦った田畑にはのどかな空気が流れ、いつのまにか小さな小学校もできて、木下で授業が始まっている。

私たちが近村の取水口を建設したとき老農夫は「うれしくて胸が痛い」と言い、モスク(教会)とマドラサ(伝統的神学校、英語や数学も教える)の建設が決まると、長老たちは「これで解放される、自由になれる」と狂喜したのである。

私たちは、農民の生存の基盤である農地を用水路によって復活させることができた。その精神的支柱であるモスクとマドラサも建設した。また用水路の保全のための職能集団である「自立定着村」も建設中である。この事業が異文化における復興支援のひとつのモデルとなればと願っている。

## 【カラー写真解説】

砂漠化したスランプール(上:2005年5月)と用水路によって小麦畑になった同地区(2009年4月)。正面奥の山が、パキスタンとの国境を隔てるスレイマン山脈。

\*図中の地名は、弊社地図帳にあわせました。